

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24242033

研究課題名(和文) 日韓交渉の考古学 古墳時代

研究課題名(英文) The archaeological research of the interaction between Japan and Korea in the Kofun era

研究代表者

武末 純一 (takesue, junichi)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：80248533

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 33,200,000円

研究成果の概要(和文)：福岡市西新町遺跡の土器を検討した結果、古墳時代前期での渡来人の存在と、鉄を目的とした交易を想定した。また、「往来する渡来人」というモデルを提起した。5世紀になると、交流地域は日本でも韓国でも広がる。韓国での倭系土器を検討した結果、交流の主体は古墳時代前期では金海・釜山地域である。しかし、中期には全羅道地域に移って韓国で前方後円墳の出現を準備した。武器・武具の検討結果もこれを支持した。近年急増した百済の馬具を検討して、日本の馬具研究が是正された。日韓の漁具を総合的に検討して、日韓の海村の様相を解明した。百済の鉄素材で製作した鉄斧も確認された。三国時代の製鉄技術は日本には導入されなかった。

研究成果の概要(英文)：We considered potteries excavated in the Fukuoka Nishijinmachi site. As a result, considering the trade aimed at iron with the presence of immigrants in the early Kofun era. Also, we posed models in Japan, immigrants who come and go. In 5 century, spread either Japan or Korea Exchange area. Considering the Japanese pottery in Korea, Exchange principal was Gimhae and Busan in early Kofun period. However, they moved in the middle Kofun era to the Jeolla region, and prepared the advent of Keyhole-shaped tumulus in Korea. Study of arms and armor backed it. By considering the harness increased rapidly in recent years in the Baekje, Japan harness review was corrected. Study about Japanese and Korean fishing, clarified aspects of the maritime village in Japan and South Korea. Iron axes made by the type of iron materials excavated from Baekje. The iron-making techniques of the Three Kingdoms era have never been introduced to Japan.

研究分野：考古学

キーワード：日韓交渉 古墳時代 三国時代 考古学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の武末は、原史時代の日韓交渉を明らかにする(『土器からみた日韓交渉』, 学生社, 1991年)とともに、本研究の韓国側統括者である李健茂氏と共同で編集を補助して、弥生時代の日韓交渉研究を総括した(小田富士雄・韓炳三編『日韓交渉の考古学 弥生時代篇』, 六興出版, 1991年)。

福岡大学考古学研究室では開設以来このテーマに沿った日韓の資料を集積して、現在福岡大学名誉教授の小田富士雄氏を研究代表者として、1995・1996年度には福岡大学大学院重点特別経費による「古墳時代日韓交渉の考古学的研究」、1997・1998年度には福岡大学総合科学研究部()専門委員会の「日韓交渉考古学の基礎的研究 原史・古代を中心に」を実施したが、急激な経済発展による韓国側発掘資料の爆発的な増大で、研究のまとめは頓挫を余儀なくされた。

武末自身も、集落研究へと研究路線を切り替えて(平成17・18年度科学研究費補助金<基盤研究(C)>「百済集落の研究」)、平成17年4月には日韓集落研究会を立ち上げ、これを基盤に日韓の弥生・古墳時代集落研究を進めた結果は、「日韓集落の研究 弥生・古墳時代および無文土器～三国時代」(平成20～23年度科学研究費補助金<基盤研究(A)>)に結実した。そして、この研究の中で、古墳時代と三国時代の遺物のより精密な検討・比較という課題が大きく浮上した。

もちろんこの間もそうした研究は怠らず、また、様々な研究者による古墳時代日韓交渉の解明も続いたが、急増する資料に十全に対応できていない。そうした中で、韓国の発掘ラッシュも研究開始頃には落ち着いて、発掘資料の再検討が始まり、韓国側研究者からは『日韓交渉の考古学 古墳時代篇』の刊行を熱望する声が上がった。

そこで、武末が日韓双方の研究者と相議した結果、李健茂氏を韓国側の統括とし、重要な遺跡を集成・再検討・再実測し集成した上で、日韓両国の研究者が共同で研究課題に取り組むこととなった。

2. 研究の目的

本研究ではまず、研究の基礎となる日韓各地域の重要資料を現在の研究水準で検討して、新たな位置づけを明らかにする。それらの資料に基づいた研究課題は、期間・人員・予算に限界があるため、すべてを広く浅く扱うことはせず、以下のように絞り込む。

A. 日本列島における朝鮮半島系資料は土器・陶磁器、金属遺物(武器武具、馬具、農具、漁具、装身具、鉄素材)、横穴系の石室などを中心に、朝鮮半島の様相と比較検討して、それらの様相を総体的に把握し、歴史的意義を明らかにする。

B. 朝鮮半島の倭系遺物・遺構も同様に比較検討して、それらの様相を相対的に把握するとともに歴史的な意義を明らかにする。

この種の研究ではともすれば一方にだけ

身を置いて他方をつまみ食いする傾向があったが、韓国語に堪能な研究分担者と、日本語に堪能な韓国側研究協力者を、多くそろえて、総体的に検討する。したがって、これまでのそれぞれの国内での閉じた研究よりも論点が大きく広げて、異なった見方を明らかにする。また、両地域の研究者が往来して実際に資料を実見しながら議論するため、日韓両地域での搬入品だけでなく、これまで等閑視された変容品の様相も正確にとらえるとともに、両国研究者間の認識の差を明らかにしてそれを埋める。これらの作業で、日韓両地域の相対編年の併行関係を定め、渡来人集団の実態と変遷、日韓交渉による地域変動を明らかにする。

3. 研究の方法

武末純一『土器からみた日韓交渉』で提示した日本列島での朝鮮系資料および朝鮮半島での倭系資料を認定するための原則、[出土した地域の在来の資料とは異なった形と製作技法をもち、非普遍的で比率は不安定なのに対して、根源地では一定の比率で普遍的で、形や製作技法も系統的にたどられ、他の遺構遺物からも矛盾がない]という原則に準拠する。また、日韓両地域の研究者の認識を高め、破片の考古学を実践して、これまで見過ごされた資料を摘出する。論考は、最低でも日韓各1名の研究者が同一テーマに取り組み、より幅を広げた解釈を得る方法をとる。

なによりも、日本側の視点で韓国側の資料を検討し、逆に韓国側の視点で日本側の資料を検討して、絞り込んだ研究課題ごとに、それぞれの国内の研究だけでは見えなかった資料の新たな側面、分析、解釈を提示する。

4. 研究成果

土器の検討では、まず福岡市西新町遺跡で古墳時代前期の渡来人の様相を検討した。ここは大きく西地区と東地区に分かれ、東地区は加耶系、西地区は百済(馬韓)系が主体となる。渡来人の存在を示す資料には、甑や小型平底鉢などの朝鮮三国系軟質系土器、竈があって、三国土器の要素が入った擬土師器や土師器の要素が入った擬三国土器は、在来人と渡来人の混住による相互交流・影響関係を示す。竈住居のまわりに偏在炉住居、その外に中央炉住居という配置も同様で、ここは国際交流港と位置付けた。その目的は、出土した鉄素材からみて「加耶の鉄」であった。渡来人集団はこの時期では日本列島に類のないほどの規模であったが、竈は他の遺跡に広がらず、定着には失敗した。この遺跡の墓地では三国系土器がほとんど出ないため、「往来する渡来人」の可能性を提起した。

本遺跡と同様な渡来系土器は山陰・山陽・近畿地域のいくつかの遺跡にもあり、対外交渉ルートが近畿まで1本化した。朝鮮半島の釜山市東萊貝塚や金官加耶の首都である金海鳳凰台遺跡では、布留式系甕を含む多量の土師器系土器が百済(馬韓)系土器と共に出るから、西新町遺跡は全羅道地域から近畿地

域までつながる金官加耶 倭政権交流の一大結節点で、本遺跡の設定には金官加耶の意向もあったと考えた。

また、鉄製農具の研究では、古墳時代前期の代表的な古墳である椿井大塚山古墳で百済系のサルポ(田の畔に水口を切り首長権を示す鉄製の儀器)と共に、忠清北道地域で製作された分厚い弾琴台型鉄鋌を加工した大型板状鉄斧が副葬されていたことが明らかになった。西新町遺跡の百済(馬韓)系土器の多くは韓国の全羅道地域と関係するが、忠清道系の土器もある点も、この成果を裏打ちする。

西新町遺跡は前期後半のある時点で突然なくなる。玄界灘沿岸で注目される中期の渡来人居住集落には、同じ早良平野の吉武遺跡がある。炊事用軟質系土器が多数あり、渡来人の定着を示す。甗には加耶系、百済(馬韓)系、新羅系、百済系などがあり、西新町遺跡より対外交流の範囲が広がって、さまざまな地域の人々が渡来した。ここでは軟質土器小型平底鉢の土師器化も注目され、故地のそれを忠実に再現した例から、土師器化した例まであって、渡来人の倭人化の過程も捉えられた。

この時期の重要な初期須恵器窯である朝倉窯跡群で生産された加耶系初期須恵器は、朝倉市池の上・古寺墳墓群に副葬され、加耶の葬送儀礼を再現して、土壙墓の中の頭と足元に須恵器を置く場合もあり、渡来した加耶系須恵器工人の姿を示す。副葬品には鉄製のU字形鉄刃や曲刃鎌、鍛冶具、馬具もあり、かれらは新しい農業土木技術や鍛冶技術、馬の飼養技術を持つ開発集団でもあった。ただし、この墓地は初期須恵器の生産に先行する4世紀後半から造営がはじまるから、在来人集団の中に渡来人集団が組み込まれたとみられる。しかも土器の主体部内副葬は土壙墓に限られ、墳丘や周溝を持つ上層の古墳では墳丘上や周溝への供献だから、渡来人集団は、属する集団内部でもおおむね下層に配置され、池の上・古寺墳墓群の集団自体も、隣接する前方後円墳に葬られた朝倉地域の首長層に再編・再配置され統轄された。

近畿地域でも大阪府部屋北遺跡は、百済(馬韓)系の軟質系土器や、移動式竈、U字形板状土製品、大量の製塩土器、多くの馬歯・馬骨・馬具(轡・鞍・輪鐙)から、馬を飼育した集落で、渡来人が大きく関わる。ただし、やはり純粋な一集団による自由な飼育ではなく、いくつかの系統があり、再編されたとみられる。鉄器生産の大規模集落である大阪府大泉遺跡の百済(馬韓)系の軟質系土器は5世紀が主体だが、鍛冶炉は後期が主体で、渡来人の定着と技術転移に時間差がある。私たちは、渡来人が来たらすぐに技術が移転して広がり盛行すると考えがちだが、「渡来人の定着によるその地域と故地との交流回路の開設と維持」を考える根拠となった。

いっぽう近畿地域の大規模初期須恵器窯

跡群である大阪府陶邑窯跡群では、百済(馬韓)系ではなく加耶系擬軟質土器が多数を占めた。こうした生業毎の渡来人の出自の違いの解明も今回の成果である。

古墳時代中期の朝鮮半島の倭系土器は、金海・釜山地域の中心部である大成洞や福泉洞古墳群では、古墳時代前期の布留式土器からの変容品とそのなれの果てがほとんどである。搬入品や忠実再現品をはじめとした古墳時代中期の形態をもつ土師器系土器は、阿羅加耶から全羅南道まで、それまでとは異なった地域に広がる。初期須恵器の出土状況も合わせれば、金官加耶と倭政権の交流回路崩壊後にも全羅道地域と日本列島との交流回路は加耶での新たな結節点の形成を得て持続したとみられる。とくに龍院里貝塚での土師器系土器の集中出土や木城里石停遺跡での一住居跡への土師器系土器の集中は、新たな海村交流網の設定とそこへの倭人の居住を予測させた。こうした動きが古墳時代後期に全羅道地域で前方後円形墳が出現する下地を準備したとみられる。古墳時代中期の全羅南道地域沿岸部では、新たに倭系の帯金式甲冑を副葬する倭系古墳が出現することも同じ脈絡で捉えられた。韓国の前方後円墳研究と同様に、これらの古墳も倭人か否かの二者択一で考えるのではなく、多様なあり方を考えておくことが、韓国側の研究成果からも提起された。

また、百済中期・後期の首都である公州と扶余には倭系の墓制である横穴墓が見られるが、古墳群の中での様相からみて、北部九州勢力と関連する倭(系)人の墓である可能性が高く、倭(系)人達は既存の現地集団の中に少数で編成され独自勢力化が抑制されたとみられる。

鉄・鉄器生産では、さまざまな鍛冶技術は導入されながらも、朝鮮半島から製鉄技術と鑄造技術はついに導入されなかったことが明確にされた。そして、古墳時代前期には福岡市博多遺跡群での大小の蒲鉾形鞆羽口、大型で大量の鍛冶際、鉄板の裁断片などからみて、舶載鉄素材の質に左右されない鉄器生産の実現を示し、近畿地域にまで及んで、長大な武器類の安定的な供給にもつながったことがわかった。古墳時代中期には、前期以来の武器武具の他に地板の組み立て、鋳の製作、象嵌作業など、中座位が必要になり、工人の作業姿勢や設備の配置が大きく変化する。鞆羽口の形態も多様化して、固定式と着脱式に分かれ、特に後者はこの時期に朝鮮半島から導入され、炉内への挿入角度を状況に応じて変えられる利点がある事を明らかにできた。ことに日本の東北地域では鍛冶工房の普及が馬関連資料、三国系土器、竈住居と相関性が高い点を明らかにできた。

暦年代では百済地域の集落や墓から出土する中国陶磁を用いて推定を試みた。その結果、百済土器の編年と共伴する中国陶磁の間に矛盾はなくて伝世も認められず、これまで

の加耶馬具を用いた暦年代よりは遡ることになった。馬具では百濟馬具が前期から後期まで通時的に編年され、特に前期の資料が充実したことによって、日本列島の馬具研究では、これまでの加耶馬具や新羅馬具だけでなく百濟馬具の系統も考慮すべきこととなった。また、詳細な検討の結果、福岡県御所山古墳には高句麗製の馬具が含まれることが明らかになったのも大きな成果である。

漁具では古墳時代の出土品を網羅的に検討した。その結果、古墳時代中期前半に渡来系の鉄製漁撈具製作技術が導入されるとともに、古墳の出土品と海浜部の集落出土品には大きな齟齬が存在することが判明した。古墳出土品は近畿の倭王権の統治理念を表現したもので、天下観の現れであるが、現実には、弥生時代以来の海村による相互往来する対等な日韓交渉が行われていた。今回、韓国側でも総体的に漁具を検討するとともに、嶺南地域の東海岸をモデルケースにして、浦口を掌握する首長(海尺)の存在が提唱され、日本側の古墳時代海村に近いあり方が想定できるようになった。

装身具は5世紀以降の金属製装身具に焦点を絞り、冠、耳飾、帯金具、飾履を検討した結果、日本列島出土品には倭王権が意図的に配布、下賜しようとして集中的に収集したものと、倭王権内部の豪族や地方豪族が朝鮮半島情勢に関わる中で個別に入手したものとという二者が浮かび上がるとともに、日本列島の製品も考えられた。

装飾大刀では三国時代装飾大刀の主要属性として、環頭部の形態、柄縁金具、柄部装飾、外環の龍文装飾を取り上げて分析し、百濟、新羅、加耶、全羅道地域の地域色を抽出した。その結果、日本の宮崎県持田古墳 26号出土の三葉環頭大刀は、百濟、新羅、加耶の総合的な製作技術で製作されているため、栄山江流域の特性と類似する点が指摘できた。

最後に、今回の研究では日韓両国の研究者がひざ突き合わせて本音で議論したため、長期的な信頼関係がさらに堅固になり、将来の日韓交渉考古学研究を担う若い人材が育ったのも大きな成果と言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 61 件)

桃崎 祐輔、金属容器、ものと技術の古代史、査読無、1、2017、pp.223 273

坂 靖、蘇我氏の遺跡学、古代学研究、査読有、第212号、2017、pp.41 52

武末 純一、特集 古墳時代・渡来人の考古学 集落、季刊考古学(雄山閣)、査読無、第137号、2016、pp.47 52

桃崎 祐輔、日本列島の初期馬具、騎馬文化と古代のイノベーション、査読無、1、2016、pp.176 215

亀田 修一、特集 古墳時代・渡来人の考古学 渡来人、季刊考古学(雄山閣)、査読無、第137号、2016、pp.76 81

高久 健二、特集 古墳時代・渡来人の考古学 竈、季刊考古学(雄山閣)、査読無、第137号、2016、pp.53 57

山本 孝文、百濟後期型横穴式石室の受容と地域勢力の動向、中西部地域考古学研究、査読無、1、2016、pp.322 342

重藤 輝行、船原古墳とその時代、国史跡指定記念企画展 船原古墳展、査読無、1、2016、pp. 25 30

吉井 秀夫、受容様相から見た三国時代墓制の変化とその歴史的背景、三国時代国家の成長と物質文化、査読無、2、2015、pp.108 122

坂 靖、近畿地方の埴輪と韓半島南部の埴輪、韓国の円筒形土器(埴周土器)、査読無、2015、pp.116 157

重藤 輝行、古墳時代中期の日本列島 九州、季刊考古学(雄山閣)、査読無、別冊 22、2015、pp. 20 29

山本 孝文、百濟後期横穴式石室の編年と埋葬構造、古文化談叢、査読有、74号、2015、pp.116 157

武末 純一、筑紫の5世紀社会と対外交流、国際シンポジウム(群馬) よみがえれ古墳人 東国文化発信事業 金井東裏遺跡の時代と東アジア、査読無、1、2014、pp.22 25

亀田 修一、吉備の5世紀の社会と対外交流、国際シンポジウム(群馬) よみがえれ古墳人 東国文化発信事業 金井東裏遺跡の時代と東アジア、査読無、1、2014、pp.18 21

高久 健二、朝鮮三国時代の王墓、アジアの王墓、査読無、1、2014、pp.61 81

武末 純一、新鳳洞古墳群にみられる日本文化要素、新鳳洞古墳群をあらたにみる(忠北大学校博物館学術叢書)、査読無、1、2013、pp.294 347

亀田 修一、古代宗像の渡来人、「宗像沖ノ島と関連遺跡群」研究報告、査読無、2013、pp.43 65

桃崎 祐輔、九州出土子持勾玉研究入門、福岡大学考古学論集、査読無、2、2013、pp.87 136

1 吉井秀夫、百済陵墓の構造・性格と日本の陵墓、百済の陵墓と周辺地域の比較研究、査読無、1、2013、pp.163 191

坂 靖、古墳時代中期の遺跡構造と渡来系集団、古代学研究、査読有、第 199 号、2013、pp.9 16

〔学会発表〕(計 69 件)

高久健二、2016 年 11 月 5 日~6 日、東国の古墳と渡来系要素 - 北武蔵・埼玉古墳群を中心に -、「日韓交渉の考古学 - 古墳時代」研究会第 4 回共同研究会、ソウル市

坂 靖、2016 年 11 月 5 日~6 日、3~6 世紀の埴輪、「日韓交渉の考古学 - 古墳時代」研究会第 4 回共同研究会、ソウル市

山本 孝文、2016 年 11 月 5 日~6 日、後期・終末期古墳の様相 - 韓半島における古墳の終焉と日本の終末期古墳、「日韓交渉の考古学 - 古墳時代」研究会第 4 回共同研究会、ソウル市

吉井 秀夫、2016 年 11 月 5 日~6 日、横穴式石室の様相、「日韓交渉の考古学 - 古墳時代」研究会第 4 回共同研究会、ソウル市

桃崎 祐輔、2016 年 7 月 3 日、玄界灘沿岸の騎馬文化 糸島出土馬具が語る古墳時代、『伊都学』第 2 回 伊都国歴史資料館講座、糸島市

山本孝文、2016 年 6 月 11 日、Burials of Emigrants: The Spread of Burial Customs as seen from Stone-Chamber Tombs in Korea, Japan and China、Seventh Worldwide Conference of the Society for East Asian Archaeology, Boston

桃崎 祐輔、2015 年 10 月 4 日、鈴が語る古代の国際交流、鈴の文化史 宗像の考古学 5、宗像市

亀田 修一、2014 年 10 月 1 日、百済と倭の交流 近年の調査成果を中心に、第 60 回百済文化祭国際学術会議、扶余邑

武末 純一、2015 年 9 月 17 日、韓国の鉄関連遺跡・遺物研究の現状 初期鉄器~三国時代、日本鉄鋼協会 鉄の技術と歴史フォーラム、福岡市

山本 孝文、2013 年 9 月 26 日、水村里古墳群出土帯金具の系統、韓国忠清南道歴史文化研究院、公州市

重藤 輝行、2013 年 6 月 23 日、古墳時代中期の土師器からみた九州の地域性と地域間関係、九州前方後円墳研究会、熊本市

〔図書〕(計 8 件)

武末 純一 編、「日韓交渉の考古学 - 古墳時代」研究会、日韓の古墳、2016、325

武末 純一 編、「日韓交渉の考古学 - 古墳時代」研究会、日韓 4~5 世紀の土器・鉄器生産と集落、2016、332

坂 靖 編、檀原考古学研究所、古墳時代の渡来系集団の出自と役割に関する考古学的研究、2016、136

武末 純一 編、書景文化社、武器・武具と農工具・漁具、2014、250

武末 純一 編、「日韓交渉の考古学 - 古墳時代」研究会、日韓交渉の考古学 - 古墳時代、2013、189

武末 純一 監訳、庄田 慎矢・山本 孝文 訳、同成社、概説 韓国考古学、2013、494

武末 純一 編、京都朝鮮古代研究会、第 24 回東アジア古代史・考古学研究会・交流会 予稿集、2013、148

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武末 純一 (TAKESUE, Junichi)
福岡大学・人文学部・教授
研究者番号: 80248533

(2) 研究分担者

桃崎 祐輔 (MOMOSAKI, Yusuke)
福岡大学・人文学部・教授
研究者番号: 60323218

高久 健二 (TAKAKU, Kenji)
専修大学・文学部・教授
研究者番号: 00281197

亀田 修一 (KAMEDA, Syuichi)
岡山理科大学・生物地球学部・教授
研究者番号: 10140585

坂 靖 (BAN, Yasushi)
奈良県立橿原考古学研究所・附属博物館・
課長
研究者番号: 30250377

山本 孝文 (YAMAMOTO, Takafumi)
日本大学・分理学部・准教授
研究者番号: 40508735

重藤 輝行 (SIGEFUJI, Teruyuki)
佐賀大学・文化教育学部・教授
研究者番号: 60323218

吉井 秀夫 (YOSHII, Hideo)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 60323218

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

李健茂 (LEE, Keon mu)
金武重 (KIM, Moo jung)
朴升圭 (PAK, Seung gyu)
李暎澈 (LEE, Yeong cheol)
趙晟元 (JO, Seong won)
金才喆 (KIM, Jae cheol)
金度憲 (KIM, Do heon)
禹炳喆 (WOO, Byeong cheol)
金赫中 (KIM, Hyeok jung)
李賢珠 (LEE, Hyeon ju)

金栄珉 (KIM, Yeong min)
金東淑 (KIM, Dong suk)
洪潛植 (HONG, Bo sik)
韓玉珉 (HAN, Ok min)
李在賢 (LEE, Jae hyeon)
金洛中 (KIM, Nak jung)
李東冠 (LEE, Dong gwan)
金在弘 (KIM, Jae hong)
柳昌煥 (RYU, Chang hwan)
李尚律 (LEE, Sang yul)
權度希 (KWON, Do hie)
張允禎 (JANG, Yung jeong)
李漢祥 (LEE, Han sang)
咸舜燮 (HAM, Sun seop)
金吉植 (KIM, Gil sik)

土田純子 (TSUCHIDA, Junko)
寺井誠 (TERAI, Makoto)
田中清美 (TANAKA, kiyomi)
村上恭通 (MURAKAMI, Yasuyuki)
高田寛太 (TAKADA, Kanta)
豊島直博 (TOYOSIMA, Naohiro)
松崎友理 (MATSUZAKI, Yuri)
鈴木一有 (SUZUKI, Kazunao)
青木敬 (AOKI, Takashi)
河野正訓 (KAWANO, Masanori)
魚津知克 (UOZU, Tomokatsu)
諫早直人 (ISAHAYA, Naoto)
宮代栄一 (MIYASIRO, Eiichi)
宇野慎敏 (UNO, Masatoshi)